県の歴史過程を具体的に述べるが、とくに嶺南地区から激しい復県運動が起こった複雑な事情を明らかにする。第二章の「青年の群像」では、明治一三年武生の松村才吉はじめ四名の青年によってつくられた雑誌『慷慨新誌』を中心に、かれらの自由民権運動の主張や活動、それに杉田定一に積極的に協動した経緯を論述する。さらに自由党員名簿及び立憲政党名簿を掲げ、その内容を分析する。第三章の「新聞の誕生」は、「福井新聞」「雪の夜語り」「越陽絵入新聞」「北陸自由新聞」の各新聞につき、当時の政治社会情勢とのかかわりにおいて、興味ぶかく説いている。

第四章の「窮愁一適」では、杉田定一の「窮愁一適」より数編の詩を引用し、政府の強い言論圧迫にもめげず「自由を思い民権を思う一人の政客」としての人間像を鮮明に浮き彫りにする。

そして本書の最後に著者は、「ともあれ福井置県の年、百年の昔に南越の人びとに訴えかけた杉田の言葉をわれわれは百年後の今日、今一度味って戴きたいと考える」と、切々と力説している。

たしかに置県前後の本県の複雑な諸情勢のなかで、とくに杉田定一の主導のもとで、自由民権にめざめた一部青年層のたくましい動向を、著者が長年にわたり収集した中央及び地元の関係史料を精いっぱい駆使して解明した点で、置県百年の意義を再認識させる絶好の著書として、ぜひ一読に値する。

（三上一夫）

◇新刊紹介

福井置県その前後　池内　啓著

福井県郷土新書の第七集として、福井県郷土誌懇談会から刊行された。著者は福井大学の池内啓教授（福井県史編さん近現代史部会長）で、内容は四章からなる。

まず第一章の「置県の陣痛」では、福井置